

基本情報 ■編者：不詳 ■年代：昭和24年(1949) ■寸法：縦24.4cm

横18.4cm 厚さ3.2cm



この資料のココがすごい!!

作者それぞれの描き方の違いを見比べてみてください!!

お気に入りポイント

四季折々の作品が見られると共に、様々な作者の絵が楽しめる!



学芸研究員の目



学芸研究員
相川ひとみ

明治から大正時代にかけての日本の美術教育というものは、自由に絵を描くといったものではありませんでした。手本に沿って描いていくという臨画が一般的で、筆使いまでも手本通りに模写するというのがこの時代の美術教育の特徴です。『千紫萬紅』は、このような臨画の手法をとる際の絵手本として用いられたものです。そのため、筆使いや色彩、構図が様々な作品が10点集められました。当時は手本を見ながら模写することで、絵を描く技術を磨いていったと考えられています。



四季折々の風情を楽しむ絵画集

『千紫萬紅』とは

『千紫萬紅』とは、その表題のとおり、四季折々の様々な花や風景の絵画が10点収録されている画帖(画集)である。10点とも作者、題材が異なっている複数人による共同制作によるものである。

本作の形態は絵を集めた**折り本**^{*1}である画帖(がじょう)となっている。折り本は、卷子本のマイナス面である繙読(はんどく)の不便を解消するものである。先頭の部分と最後の部分に丈夫な表紙が取り付けられ、帖装本(じょうそうぼん)と呼ぶこともあり、本作も表紙の厚紙に布が貼られているため、帖装本の形式を取っている画帖であることが分かる。

本資料の編者とテーマ

編者については、記載がないため不明。各作品の作者についても、同様、資料不足のため不明。また、本書にはカバーがあり、カバーの表題は『千紫萬紅』であるが、画帖本体の表題は「怡情幀(いじょうちやう)」と名前が異なり、題を定めた人物もカバーは馨、印章は香亭で、本体は大□、印章は2つ並んでいるのが潰れているため不明だが、別の人物であることが読み取れる。

収録されている作品は、春の紅白梅、川と鳥、夏の山、山と川、竹と鳥、冬の富士、雪降る家、秋をテーマにした3点の合計10点である。

秋をテーマとした作品

本資料の中に、秋をテーマとして描かれた柿とメジロの絵画がある。この作品は『千紫萬紅』の表題を定めた香亭と同人物が描いた作品である。熟れた柿の橙色の色鮮やかな様と、丸みを帯びたメジロの愛くるしい姿が一つの作品の中に収まっている。秋の豊饒を表わすような趣のある作品である。

この画帖の中で秋を描いた作品は、柿とメジロの他に、毬栗(いがぐり)、秋の風景の3点である。柿とメジロはメジロが柿を啄ばもうとした一瞬をアップで捉えた作品、毬栗は膨らんだ栗が毬から零れ落ちる様子を描いた作品であるのに対し、秋の風景は遠くに見える山々と川、そして手前の紅葉をも場面に入れ込んだ、秋の風景を切り取った一枚である。同じ季節であっても、異なった視点からその季節を描き、日本の四季折々の長閑な美しさを味わうことができる画帖である。本体の表題「怡情幀」の怡は、訓読みでよろこぶと読み、心がなごむ、打ち明けて喜び楽しむという意味を持つ。『千紫萬紅』の自然の美しさを感じることを喜びと思えるような画帖であるということを表したかったのかもしれない。

学芸研究員 相川ひとみ
実習生 渡邊 千明

用語解説 詳しくはP27へ

*1 折り本